九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日中同形異義漢字語の研究 ： 「愛人」の意味変化をめぐって

舒，志田
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/10356

出版情報：文獻探究. 37, pp.1-14, 1999-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

日中同形異義漢字語の研究

――「愛人」の意味変化をめぐって――

舒　志田

一、はじめに

1．同形異義語

中国語と日本語は、多くの漢字を共有している。漢字の正書法上の差異を無視すれば、その多くは同じ形をしている[*1]。しかし、同じ漢字で書かれた単語は、日本語としての意味と中国語としての意味が常に同じとは限らない。日中同形漢字語のうちに、意味・用法のズレが見られるもの、若しくは全く異なる意味のものが随分ある。いわゆる日中同形異義漢字語である。

以下、「愛～」といった構成の漢字語を例として見てゆこう。

Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
あいいく【愛育】	あいけん【愛犬】	あいがん【愛玩】
あいいん【愛飲】	あいこう【愛校】	あいきょう【愛嬌・愛敬】
あいえんか【愛煙家】	あいこく【愛国】	あいきょう【愛郷】
あいき【愛機】	あいさい【愛妻】	あいこう【愛好】
あいきょうび【愛敬日】	あいじ【愛児】	あいじょう【愛情】
あいこ【愛顧】	あいしゃ【愛車】	あいしょ【愛書】
あいさん【愛餐】	あいたしゅぎ【愛他主義】	あいじん【愛人】
あいしゃ【愛社】	あいば【愛馬】	あいせき【愛惜】
あいじゃく【愛着・愛著】	あいぶ【愛撫】	あいそ【愛想】
あいしょう【愛誦】	あいべつりく【愛別離苦】	あいちょう【愛聴】
あいじょう【愛嬢】	あいぼ【愛慕】	あいびょう【愛猫】
あいぞう【愛蔵】	あいよう【愛用】	※　『ハイブリッド新辞林』より（1998 年、三省堂）；分類は筆者。
あいそく【愛息】	あいよく【愛欲】	
あいちゃく【愛着】	あいれん【愛憐】	

Ⅰは現在の日本語独自の表現である。Ⅱは、日中両方ともにあるもので、かつ意味・用法が殆ど一致しているものである。Ⅰについては、かつて中国では用いられたか

どうか、和製漢語の場合であっても、かつて（特に十九世紀末から二十世紀初頭）中国に持ち込まれたことがあるかどうか、などの研究課題が依然多い。Ⅱについては、それぞれの語がどちらからの流入か、流入時期などを特定する必要があり、とりわけ日本の文献における日本語としての使用実態を明らかにする研究が期待される。

ここで問題にしているのはⅢの部のいわゆる同形異義語である。上記の例では、「愛玩」「愛嬌」*2「愛想」「愛聴」は中国語では「愛＋ v.」（「よく～する」の意味）という構成に想定されるのが普通なので、それぞれ、一つの独立の語彙としては頗る不安定的なものである。「愛書」「愛猫」などは、中国語として日本語と同じ意味をも持っているが、更に、「我愛書／わたしは本が好き」「我愛猫／私が猫が好き」といったような使い方もある。 中国語の「愛好」は日本語では「趣味」になる（但し、動詞としての意味が同じである)。「愛惜」は両方とも「大切にする」という意味であるが、日本語のほうがかなり文語調である。従って、中国語「你要愛惜她／彼女を大切にしなきゃ」を、「彼女を愛惜しなければならない」と、そのまま日本語に直訳するとやはり可笑しい。「愛情」は中国語でも日本語でもなにかを愛する感情を示す。しかし、語義の範囲が異なる。中国語の「愛情」は特に異性間の「愛情」だけを指しているが、日本語の「愛情」は異性以外の人に対しても、事物に対しても言える。

2．研究目的・方法

従来の日中同形異義漢字語の研究は、個々の語の意味記述に止まっているように思われる。しかし、日中両言語における語彙交流の史実を考慮する場合、これだけでは不充分だと思われる。

> 外来の要素が既成の語彙体系に入りこむとき、意味や用法において、多かれ少なかれ変化が生じ、原語からずれていくのは普通であり、＜中略＞変化を蒙らずに、異言語に入ってくる外来語はないといってよい。従って、変化の有無ではなく、変化の実態や変化に於ける程度の差を問題にしなければならない。
>
> （沈国威 1994、pp.61 ～ 62）

特に、個々の語に関しては、その意味のズレ、変化などについての詳細な考察が、まだ欠けていると言えざるを得ない。

本稿では、「愛人」を例として、その意味変化をめぐって、主に近代における日中間の交渉及びそのズレの生じた過程を明らかにしたい。英漢・漢英・英和・和英・国語辞書（日中）など各種の辞書に於ける対象語の意味記述、及び各種の文芸作品などに於ける用例を収集し、その意味、用法のズレの様相と過程などを明らかにする。また、単なる語誌的な研究に止まらないように、該当語の意味・使用の変化に伴う社会、文化的な背景の把握にも留意しながら、考察を行いたい。

二、「愛人」の意味記述

日中両方の意味を合せて見れば、「愛人」には、大体、次のような意味がある。

日中共通の意味：

① 人を愛すること。

② 愛している異性。恋人。

日本語だけにある意味：

③ 情人。「情婦」「情夫」に代わる語で、普通「恋人」と区別している。

中国語だけにある意味：

④ 配偶者を指す。

⑤ 可愛い；喜ばしい。

意味①は中国の古典にあり、漢籍の流布と共に日本にも伝わった。例えば、明治期の漢学者の中村敬宇が唱えた「敬天愛人」説に見られるものは、この①の意味である。但し、本稿では主に近代における日中語彙の交流を問題にするので、この意味①について、詳しい検討は暫く省くことにする。また、意味⑤における「愛人」は、他のものとの間に、語構成的な違いが見られるので取り除く。ここで問題にしたいのは意味②、③、④である。

三、翻訳語としての「愛人②」の成立

江戸末期及び明治時代の英和・和英辞書類を 30 余種を調べてみた結果、「愛人」という用語または見出し語が出たのは、次のようなものがある。

1） 英和対訳袖珍辞書（堀達之助等編、1862）

Lover, 愛スル人、恋人。

Sweet heart,愛人

Honey, 蜂蜜、愛人

2） 附音挿画英和玉篇（入江依徳訳、東京鶴声社、1885）

Darling, 寵愛ヲ受クル人。

Lover, 愛人、情郎。

3） 双解英和大辞典（島田豊編、共益商社書店、1892）

Darling, One who is dearly beloved.最愛ノ人、可憐子、愛人。

Lover, One who loves; afriend;especially one in love with a person of the opposite sex; one who likes or is pleased.愛スル人、友、愛人、情人、朋友、恋人、好ム人。

言葉自体では「愛人」が「恋愛」よりも早く成立したのである。広田栄太郎氏の調

査によると、「恋愛」は明治七年（1874）加藤弘之の使用例を最初として、それが普及するのは明治二十年代に入ってからである。一方、辞典のほうでは、明治二十年（1887）、仏学塾出版の『仏和辞林』に、Amour の訳語として「恋愛」が掲げられている[*3]。一般には、「恋愛」があって始めて「愛人」があるから、言葉の面でも「恋愛」のほうが先に成立したろうと、わたしが推測したが、『英和対訳袖珍辞書』に見られる「愛人」の例は、意外に早い印象を与える。但し、それが一つの固定語彙として、どの程度定着しているのか、甚だ問題である。わたしが調べたところ、辞書類以外の文献においては、明治二十年代以前の「愛人」の用例は確認できなかったのである。

半沢洋子氏が、人を示す「愛人」は翻訳上の必要から、「恋人」と性別上の対立語として成立したものだろうと指摘しているが[*4]、しかし、私が調べた限り、『英和対訳袖珍辞書』に見られるような例はむしろ極少数であり、しかも、『附音挿画英和玉篇』のあたりから、Lover の訳語としても「愛人」が宛てられたのである。だから、「恋人」と性別上の対立語として成立した意図的なものよりも、最初から、単なる「愛シ人」という意訳より凝縮された漢語形として、触発的に誕生したものと考えたほうが妥当かもしれない[*5]。それは、やがて「愛スル人、愛サレル人」とも解釈されるようになった。従って、『英和対訳袖珍辞書』と『附音挿画英和玉篇』における「愛人」は、字面が同じであるが、意味的には違っているように思われる。

なお、実際の文学作品や書簡などにおける意味②の使用例はもう少し遅れ、大体明治二十年代の後半あたりから見られるようになったのである。即ち『双解英和大辞典』が現れた後である。本辞書は何回も版を重ねて世間に出回り、世の人に広く読まれたので、「愛人」という言葉の定着に関係したのかもしれない。

4)　僕の存在には貴方が必要だ。どうしても必要だ。僕はそれだけの事を貴方に話したい為にわざわざ貴方を呼んだのです。」代助の言葉には、普通の<u>愛人</u>の用いる様な甘い文彩を含んでいなかった。　『それから』（1909）

5)　しかし僕にもしそんな<u>愛人</u>が出来たら、叔父さんはたとい僕から手紙を貰わないでも、喜んで下さるでしょう。　『彼岸過迄』

それまでは、「恋人」のほか、「色」「色男」「色女」などの和語又は「意中人」「情人」「情郎」「情娘」などの漢語が用いられた。

6)　然レドモ、汝余ニ告ズ恋マニ<u>情郎</u>ト逸居シテ長ク歓楽ヲ尽ス。　『花柳春話』（1878）

7)　処女若シ一旦心ヲ委ヌルアラバ必ズ見聞ノ感ヲ絶チ飲食ノ味ヲ忘レ其<u>情人</u>ノ死後ニ至ルモ尚ホ貞操ヲ守リテ二夫ニ見エズ。　（同上）

他に、方言では大槻文彦の『外来語源考』（1877）に示された「相思」のような言い方もある。

8)　シャンス（相思）　唐音ナリ、九州ニテ情人ヲ云フ。

国語辞書に於いては、例えば、『和漢雅俗いろは辞典』（高橋五郎・1888）、『言海』

（大槻文彦・1889）、『日本大辞書』（山田美妙・1892）、『ことばの泉』・『言泉』（落合直文）、『大日本国語辞典』（上田万年・1915）、『辞林』・『広辞林』（金沢庄三郎・1925）、『辞苑』・『広辞苑』（新村出・1935）などに、いずれも意味②での「愛人」の見出し語又は用例が見当たらない。逆に言えば、これは、意味②が翻訳による新義であることの裏付けにもなる。

そして、同時代の中国では、どうなっているか。1910 年以前の翻訳辞書類に見られる「愛人」は、依然として、従来の「人ヲ愛スルコト」の意味である。西洋文化とともに次第に中国人に知られた西洋の恋愛事情に関する言葉の訳も、まだある種の古めいたものである。

9） 英華辞典（W.H.Medhurst.1847-8 上海 Mission Press）

愛人　To love men in general.

10） 英華字典（W.Lobscheid.1866-9、HONGKONG）

Darling,　寵愛的人、切愛者、嬖人。

Lover,　愛者、姦徒、烟嫪、好者。

愛人　To love men in general.

11） 華英音韻字典集成（羅布存徳．商務印書館、1902）

Darling,　寵愛的人、切愛之人。

Lover,　愛者、情人

Sweet heart,情人、愛者

Honey, 蜜、蜜糖

ロプシャイトの「愛者」の訳は、中国語の古典によったものであり、日本の「愛人」とある類似性を有している。「愛人」が使われる以前、中国近代の翻訳小説にも用いられたことがある。

12） 嬌娜就聘於摩登家為書記。故在園内与其愛者私会云。

（迪斎訳『盗偵探』、『月月小説』第三号、pp99）

13） 前回記羅夢之愛者嬌娜。為摩登家書記。（同上、pp102）

中国は、近代に入ってからは、西洋文化に出会い、それまでとまったくちがう対応をせまられることになった。「遅れ」に気づいた中国人は、歴史上初めて異文化を手本とせざるをえなくなった。恋にかぎっていえば、欧米文化の移入により、恋の習慣から、恋の情緒表現にいたるまで大きな変化が生じた。中国文学において「恋愛」ということばは、十九世紀の後半から二十世紀にかけて西洋文明の用語の訳として、また西洋文化の一つのシンボルとして、中国に導入されたと言われている。[*6]

西洋風の恋愛に関するその他の表現もほとんど翻訳流のものであり、それが最初はたどたどしさを伴い、次第に洗練され、自身も変革した中国語の組織の中に新しい表現として定着するに至った。人を表す西洋流の「愛人」も、新名詞として人々に認識

されている。

14)　王雲五新詞典（商務印書館・1943）

【愛人】博愛人群。（論語・陽貨）君子学道則愛人。

〔今〕（1）同上。（2）親愛之人，（特指男女間之関係）。pp55

而して、それが一般に定着するまでは、いろいろな工夫が凝らされたようである。そこには伝統の根強い抵抗があったとさえ感じられる。周知のように、中国古典における「愛」は主として、君主の愛、父母の愛、夫婦の愛などといった「倫理愛」であり、それも「愛卿」「愛子」「愛女」「愛妻」「愛妾」などの表現に反映された、いわゆる「上対下」「強者対弱者」の「愛」である。近代西洋文化との接触によって作り出された「愛人」に見られる平等・自由の「愛」は一切ない。1889 年に林紓が訳した西洋の恋愛小説、『巴黎茶花女遺事』（フランスの小説、デュマ・フィスの椿姫の中国語訳、原題 La dame aux camelias.）は一世を風靡したが、そのなかには「愛人」という用語がなかった。また、林紓が翻訳にあたって、「愛」という言葉と並んで、「情」のような従来の文学によく用いられた語句を訳本の中に故意に混入させ、西洋の恋愛事情を如何にも中国流に解釈しようとした。それは一見、ただ、読者をこういった外国作品に馴染ませようという手段であるように見えるが、根本的にはやはり中国伝統の「愛」への冒涜をできるかぎり避けようとした訳者の意識的な問題ではないか、とも思われる。従って、「愛人」の登場は、二十世紀初頭に勃興した「新文化運動」を待たなければならなかった。

以下、人を指す「愛人」が中国ではどのように導入されたのか、について見ていきたい。

前述した『王雲五新詞典』は、「愛人」の新義を記したが、それは日本からの新名詞なのか、或いは宣教師・翻訳者などによる新名詞なのか、についてはっきり指摘していないし、その用例をも何も示していない。

私が調べた限り、人を意味する「愛人」をいち早く掲載した辞書は李玉汶の『漢英新辞典』である。

15)　漢英新辞典（商務印書館・1918）

愛人　Honey;sweet-hart;lover;admirer;mistress（指女）.

同辞典の例言によれば、「本書所備之参考。為漢英、英漢、和英、英和、各辞典。英語、漢語、日語、各辞典。以及各専門辞典。術語辞典。共八十余種。」（波線筆者）とあるように、日本の辞書をも参照したので、ここでの意味の「愛人」と言うものは、日本からの借用である可能性が十分ある。後の、『英漢模範字典』（張世鑾、歴志雲など編集、商務印書館、1929）、『総合英漢辞典』（1935）にも、「愛人」が登場している。この二つ辞書はいずれも日本の辞書からの影響を受けている。

16)　英漢模範字典

darling　n.愛人 ― a.鍾愛的；親愛的

sweetheart　n.情人；愛人；恋人

love　n.④情人；愛物

lover　1．愛好者；景仰者。2．情人。 a pair of lovers. 一対情人。a lover and his sweetheart. 情人及其情婦。

これ以前に、英語の dear を「愛人」と訳した例が見られる。

17)　Lady　Markby：Let　me　introduce　you.（To Mrs. Cheveley.）My dear, Sir Robert Chiltern is dying to know you!／麻：讓我介紹与你。（対斉佛雷夫人説）我的愛人。紀爾泰洛勃脱君。眼巴巴的望着你哩。

（『意中人』英国 Oscar　Wilde 原作、薛瑞琪訳、『新青年』1-3〔1915.11〕、pp221）

しかし、これはむしろ例外であり、my dear に対する訳語としては、「吾愛」「親愛的」などがもっと一般的である。

文学作品に於いては、武者小路実篤の『ある青年の夢』（『白樺』7-4,5 掲載・1916）を、魯迅が 1919 年に訳した『一個青年的夢』（『新青年』7-2,3,4 掲載）に見られた「愛人」の用例がわたしが調べた限り、もっとも早いものである。

18)　幸福的神明正微笑給我家看的時候、我的愛人正把好意給我看的時候、戦争便将我運到離開本国幾千里的地方去了。（『新青年』7-2、pp236 ／原文：幸福の神が我が家に微笑みを見せだしたとき、私の愛人が私に好意を見せだした時、戦争は私を本国から何千里離れている処につれ去りました。『白樺』7-4、pp14）

19)　我們正在説笑。我因為従愛人送到了一張照相，被人笑了。（同 pp236 ／原文：私達は笑い話をしていました。私は恋人から送って来た写真に皆に笑われていました。同 pp14 ～ 15）

20)　若我能够略略推想你們的愛人和你們的父母的心，想来便未必会行若無事的殺了。（同 pp238 ／原文：あなたの愛人、御両親の心を少しでも察したらあんな呑気な気持ちであなた達を殺すことは出来なかったろうと思います。同 pp17）

21)　我如果対着愛人和父母説了、他們一定満眼含着涙、従心裏感謝你呢！（同 pp239 ／原文：私はそれを愛する者や、親に語ったならば、彼等も目に涙をためてあなた達に心から感謝したでしょう。同 pp19）

22)　来摩頭的時候，才触着了片鱗，真是連愛人也没有通知過我的一種喜悦，一這並非取笑的話。（同 pp239 ／原文：あなたが頭をさすって下さった時その片鱗にふれました。恋人も知らしてくれないある喜びでした。私は皮肉に言うのではありません。同 pp19）

23)　你也該有愛人在地上罷？這人若像我這般死了怎様呢？（同 pp252 ／原文：地上にはあなたの愛する方がいらっしゃるでしょう。その方が妾のように死んだらどうなさります。同 pp42）

但し、魯迅の訳文にある「愛人」は、その原語が必ずしも同一語ではない。上記の

例で示されたように、「恋人」「愛人」「愛する者（方）」との三通りである。つまり、字面だけではなく、その意味も正しく理解されている。

一方、魯迅の弟である周作人が訳したスペインの Vicente Blasco Ibanez 原著の『顛狗病』（Isaac Goldberg の英訳本より訳出）にも「愛人」の使用例が見られる。

24） 一天是礼拝六，巴斯加勒忒（Pascualet）従他愛人家裏回来，在村庄的一条小路上，大約半夜光景，有一隻狗咬了他一口；（中略）他的母親在他去訪問愛人的夜間，照例是等着他的，現在一見這狗的牙歯的青黒的半圏和紅点，即時叫喚起来，便在房内忙着予備膏薬和飲料。（『新青年』9-5［1921/09/01］pp672）

25） 毎礼拝六到愛人家裏去時，伊常常問起他的健康。「那咬傷怎様了？」他在姑娘的眼前只是高興的一聳肩膀，（不説什麽，）他們両人便坐下在厨房的一個角落裏，総是黙黙的互相看着，或談着未来家庭裏的衣服和妆鋪，但是不敢彼此接近。（同上、pp673）

26） 少年的愛人来了，伊的大而且黒的眼精被眼涙濡湿了。（同上、pp674）

その後、中国の新文化運動の勃興に伴い、「女子問題」「婚姻問題」「恋愛問題」が盛んに論じられるようになった。一九二四年、『婦女雑誌』十巻九号の「中国目前的恋愛問題」を発端に、『中国青年』51 期に「中国青年與恋愛問題」、57 期には「恋愛問題」、66 期には「介紹共産主義者的恋愛観」などの一連の論文が掲載され、人々の関心を呼んだ。「愛人」「恋人」などの言葉も、しばしば登場するようになった。

27） 于是乎一般青年　不能安于実際生活的現実奮闘，便耽酔于找愛人，実際生活既未解決，真誠的恋愛既難実現；于是乎折白的恋愛，不断地呈現于我們眼前。而一般青年們底心中口中只有一個「愛人」：大有呉三桂国亡父死都可以不過問，只要陳圓圓到手之趨勢。（一止「中国青年與恋愛問題」『中国青年』51 期、1924.11）

28） 即使竭力奮闘，難脱家庭，而社会処処是一様的凶悪，終不許你們一対親愛的恋人挿足。（小立「恋愛問題」『中国青年』57 期、1924.12）

29） 寂寞得我一個人，

再也没有找愛人。（普希金著、瞿秋白訳『茨岡』、1932）

30） 陳真説我一輩子找不到愛人。他也許有理。（巴金『愛情的三部曲之一：霧』1933）

しかし、国語辞書では、中華大辞典（欧陽溥ら編、1915）、辞源（陸爾奎主編、1915、1931）、辞通（朱起鳳編、1934）、辞海（舒新城主編、1936～7）、聯綿字典（符定一編、1943）などには皆、人を示す「愛人」の見出し語又は用例がない。1947 年の『国語辞典』にはじめて人を表す「愛人」の見出し語が登場している。

31） 国語辞典（第四冊・p.3791）

愛人　ayren　①即情人。　②恵愛他人

新中国成立後の『学文化辞典』辞書にもこの語が採録されている。

32） 学文化字典（黎錦熙・商務印書舘・1952.10）

愛　①喜好。〔例〕愛説愛笑。我愛這張畫。

②因為関係密接、表示特別有好感。〔例〕愛国。愛子女。

③親熱。〔例〕階級之愛。

④愛情、恋愛。〔例〕愛人。

⑤愛惜。〔例〕愛公物。

⑥容易発生某種現象的意思。〔例〕愛壊、愛干、愛長銹。

四、「愛人」の意味変化

現代中国語では、「愛人」は普通、妻或いは夫を指す。日本の国語辞書の中でさえ、このような注意書きが施されている。しかし、いつ頃からそのような使い方が始まったのか、あまり知られていない。『新語詞大詞典』(韓明安主編、黒竜江人民出版社・1991) では、

33) 愛人 ai ren 初指情人的一方、後為夫妻間的互称。△宋薇同志是我的愛人、這是誰都知道的ㅁ麻！ (魯彦周『天雲山傳奇』1979)

と、「愛人」は最初は恋人同士を指し、後に夫婦間の呼称となった、と指摘しているだけにとどまっている。

いち早く「愛人」を「夫婦を特別に指す」ように意味限定したのは、1953 年に人民教育出版社より出された『新華字典』である。

34) 愛 ①喜歓、対人或事物有好感：～祖国。～人民。～公物。～労働。

②喜歓的、有感情的（人或物）：～人（特指夫妻）。割～（捨去所喜愛的）。

③容易：這種布～壊。鉄～生銹。他～害病。 (pp618)

しかし、これ以後の再版『新華字典』には、なぜかこの「愛人」の例が取り消された。『新華字典』と同じ年に出版された『瞿秋白文集』巻 1 の扉には、作者とその妻の写真が掲載され、写真の下に、「作者和他的愛人之華」との説明がある。

もっとも前記の『漢英新字典』(1918) に既に見られるように、「愛人」の訳として、mistress（女主人、主婦、女教師、恋人等の意味）が宛てられたのであり、wife に直接に結びつかなかったものの、相当近い関係にあると思われる。但し、ここでは、女性のみ指しているので、「夫」までは含んでいない。

実際の用例では、『新華字典』よりもっと早い時期に配偶者を指す「愛人」が現れた。『漢語大詞典』(1986) には、次のような例が示されている。

35) 落拓的学生青年、常常会着這様甜蜜的幻夢：将来找到相当的職業、不一定太闊、甚至於很清苦、可是有一個愛人在懐里、有一個温暖的家庭。

瞿秋白『乱弾・懺悔』(1932) ／巻 7 ・pp632.

その他に、もういくつかを見ていこう。

36) 以前是奴隷的結婚，現在是用友愛確定的自由結合，這就是新労働者的国家要替男女們提供的。古時奴隷的両性関係，並不如現時這様是愛人又是朋友的自由公正的結合。這時候，人類的汚辱，圧迫労働者的一種可怕的弊害是可以消滅的。

（山川菊栄作、李達訳『労農俄国的婦女解放』、『新青年』9-3［1921/07/01］pp408）

37) 我是純粋作革命工作的、但我又是一位十九歳的青年、我家中尚有三十二歳的妻、俺已完婚六年了、她在家中遇的那種生活、已不是人的生活、又加上她的愛人—我在外辺不回家、永不回家、更形難堪。　（『中国青年』第99期、「通信」—怎様安置妻子）

38) 自従春天来，自従她丈夫開始了新的苦痛来，她就不安起来了的。不安於這太太的生活，愛人的生活。　（丁玲『一九三〇年春上海』1930）

39) 這種兩元化的人格，我自己早已発覚——到去年更是完完全全了解了，已經不能絲毫自欺的了；但是“八七”会議之后，我併沒有公開地説出來，四中全会之后也沒有説出來，在去年我還是決断不下，以致延遅下來，隠忍着，甚至対之華（我的愛人）也只偶然露一点口風，往往還要加一番彌縫的話。沒有這様的勇氣。

（『多余的話』瞿秋白 1935.06）

以上の四例にある「愛人」は、いずれも自分の配偶者を指すので、現代中国語の「愛人」と同じ意味合いを有すると考えられる。但し、『新語詞大詞典』の例のような、会話文での使用例はまだなかったようである。

ところで、なぜこのような使い方が起きたのか。もっとも、夫婦間の親密な情と恋人同士の恋情とは、一直線上にあるものであり、「愛人」がその両方とも言えるのも別に何の不思議もない。しかし、そこにはもう一つの理由が考えられる。つまり、中国では恋の情緒と見られるものの中に、夫婦の間の感情が重要な位置を占めているといった事実である。「未婚男女の恋がほとんどありえなかった中国では、夫婦の間の相思相愛の情は長年来、恋として見られ」[*7]てきた。『詩経』の「巻耳」「君子于役」「采緑」などの歌から、漢代、六朝の「怨情」詩、唐代の「宮怨」詩などで見られるような、夫婦の哀歓離合を詠むものは数少なくない。民間伝承においても、「孟姜女千里尋夫」などで代表されるような夫婦間の愛情物語は千百年来、言い伝えられてきた。西洋風の自由恋愛がもたらした「愛人」という言葉が、夫婦間の呼称ともなったのも、こういった伝統に関係しているのではないかと思われる。つまり、西洋の「LOVER」は、その時代中国人の目から見ると、自由恋愛の相手である「恋人」を表わすよりも、「夫婦」を表わすほうが座りがずっといいかもしれない。

そして、もうひとつ考えられるのは、社会イデオロギーの影響である。新中国が誕生して間もなく、「愛人」が夫婦を特別に指すようになったのは、男女平等を提唱した社会主義のイデオロギーに一致したからであろうと思われる。というのは、香港・台湾では「愛人」が配偶者を言うような使い方はないのである。[*8]今世紀五十年代に中国では「漢語規範化」運動が起きた。その時、いろいろな面で用語の選択と規制が

行われた。「愛人」もその時に指定された用語であるかどうか断言できないが、共産主義のイデオロギーに関係しているのは前記した二、三十年代の用例から見ても分かるだろうと思う。これらの例は、或いは共産主義を同情する雑誌に掲載されたものだったり、或いは共産主義に関する文章だったり、或いはその作者自身が共産主義者だったりである。特に、瞿秋白は中国共産党の創立期の指導者の一人であり、彼の文章の影響力もかなり大きかった。「愛人＝配偶者」の成立には彼の役割が無視できないだろうと思われる。

市場経済が徐々に進んでいる現在、中国では、配偶者の呼称として「先生」「太太」「夫人」などが復権しつつあり、「愛人」はいつか呼ばれなくなるかもしれない。

一方、日本では、「愛人」は違う道を辿った。

『岩波国語辞典』（第四版・1986）には次のような指摘がある。

愛人　恋愛の相手。こいびと。第二次大戦後、新聞で「情婦」「情夫」を避けてこの語を使い、「恋人でなく～だ」のような表現も生じた。

40）愛人を殺して自首（朝日新聞・昭和 26.1.3）

一日朝五時品川区大井山中町四二三〇丸山氏方無職〇〇〇（二九）は除夜の鐘を聞きながら、愛人の〇〇さん（二三）を殺したと大井署に自首した。（中略）〇〇は早瀬謙の芸名で日劇ショウなどに関係しており、広島県に妻子がある。

41）ピストル心中　警官と愛人（朝日新聞・昭和 26.1.9）

（前略）〇〇氏は新潟県にいる妻と別居、昨年八月ごろから〇〇さんと同居する前にも別の愛人があった。

また、太宰治が戦後間もなく書いた小説、『斜陽』（1947）には次のような例がある。

42）私が前から、或るお方に恋をしていて、私将来、そのお方の愛人として暮らすつもりだという事をはっきり言ってしまいたいのです。

43）私は、おメカケ、（この言葉、言いたくなくて、たまらないのですけど、でも、愛人と言ってみたところで、俗に言えば、おメカケに違いないのですから、はっきり言うわ）それだけ、かまわないんです。

「愛人」はいわば、俗の「メカケ」に対する雅称であり、遠回しの言い方である。「斜陽族」という流行語まで生み出した太宰治の名著が、「愛人（めかけ）」という表現の定着に大きく影響したに違いない。

ちなみに、現在の読売新聞の『差別表現・不快語・注意語要覧』では、「愛人」は、「特別な場合以外は使わない方がよい」とされる B ランクの「情夫／情婦／二号／めかけ」などの言い替えとして挙げられている。（※ A …使用しない；C …文脈によっては使わない方がよい）。

しかし、その表現すること自体に対する認識が根本的に変わらない限り、言葉をいくら替えても、結局、言い回しを重ねていく単なる「言葉の置き換え」になりかねな

いのである。戦後では聞こえのいい「愛人」も昭和四十年代に入ると、「何とも言えない陰湿な響き」を帯びるように変わった。

44) 愛人に愛人以上の昇格はないのだ。同棲、愛人という言葉には、何とも言えない陰湿な響きがあった。罪の匂いがするし、不潔であった。

45) 愛人という言葉に、陰湿な響きを感ずるのも、みずからの立場を卑下しているからであった。妻よりも愛人のほうが一段と格が下であると、観念的に決めこんでしまっているのだ。妻と愛人を、比較する必要ないのではないだろうか。妻と愛人はまったく別個のものであり、従ってその立場も対等だと考えればいい。

人間的な意味では、男と女の関係において結婚よりも愛が優先するはずである。とすれば、形だけの妻のほかに、真の愛人がいてもそれを不倫と言えるだろうか。

46) 愛する人、愛される人、だから愛人よ。そういう意味だったら、愛人って凄く素敵だと思わない？ （以上三例、笹沢左保『愛人』1969 年）

47) ふつう愛人と呼ばれる女は、相手の向うにいつも妻の存在を強く意識しながら暮らしている。愛する人のすべてが自分のもの、と言い切れないもどかしさに、自分自身を苛み、愛する人が妻や子の待つ家へ帰ってしまった後の空しさに、耐えきれない想いを噛みしめる。 （『愛人ヨーコの遺書』・解説・藤本統紀子）

五、まとめ

本稿は「愛人」について、日中間の交渉及びそれぞれの国の言語における意味変化の様子を見てきた。「愛人」は本来、「人ヲ愛スル」との意味で、これが日本の古典にも同じ意味で使われてきたが、近代に入ってから西洋文化との接触によって、翻訳語としての「愛スル人、愛サレル人、恋人」という意味の「愛人」が成立し、二十世紀初頃、中国にも逆輸入された。後に、日本の方では、「愛人」は「恋人」と区別して、主に「情婦」「妾」を指すようになり、戦後の新聞に出た愛人関係の記事に自殺・心中などといった内容が多かったせいか、この言葉には陰湿なイメージが強い。一方、中国の方では、夫婦愛を重視する恋愛事情に加わり、「男女平等」を唱える社会主義国家の新中国の成立という背景などもあって、「愛人」とは口語で専ら「夫或いは妻」を指すようになった。

注

＊1 厳密的には、音形式も同じでないと、「同形」とは言えないが、本稿では、音形式の問題を考慮に入れていない。

＊2 「愛嬌」は中国語の古典では、「なまめかしいものを愛する」（大漢和）との意

味があるが、現代語では、「這孩子真愛嬌／この子は本当に甘えん坊ですね」というような使い方しかないが、日本語と同じような「可愛い、愛想がいい」という意味も一時あったらしい。

看她的年紀至多不過十七八歳、相貌和挙動都有不少的愛嬌。

（巴金『愛情的三部曲之一：霧』1933年、pp61）

このような事実は、同形異義語の歴史的な研究の必要性をも示唆している。

＊3　加藤弘之の例は『明六雑誌』第13号に見える。辞書の方では、ロプシャイド（W.Lobscheid）『英華辞典』（1866～9）に既に、「Eagerness　…；Fevor,恋慕、恋愛」「Fond…；doting,恋愛、貪愛」のように、「恋愛」の語が散見するが、今日われわれが使う意味と必ずしも一致しない。

＊4「loverとsweetheartは、それぞれ特に、男の恋人、女の恋人をさすようであるが、《恋人》と《愛人》という訳語が対立的にあてられている初期辞典においては、他明確に男女の別を示す訳語同様、その二語により性別をも表わそうとしたものと考えられる。これは、《愛》が本来、強者の弱者に対して抱く、いとおしみの感情を意味する言葉であることにかかわりがあるのかもしれない。」

（『講座日本語の語彙10　語誌Ⅱ』明治書院、昭和58年。pp47.）

＊5　これは「愛(いと)シ子」→「愛子(あいし)」のような既存語彙に準えて新たに造出されたものであろうと思われる。。

＊6　張競『近代中国と「恋愛」の発見』、岩波書店、1995。pp9-10.

＊7　張競、『近代中国と「恋愛」の発見』pp17－36。

＊8　韓国では、「愛人」は①「人を愛すること」、と②「恋人」との意味しかない。日本語の意味での③「めかけ、情夫、情婦」、と中国語の意味での④「配偶者である妻または夫」はともにない。

【参考文献】

高名凱・劉正埮（1958）　『現代漢語外来詞研究』文字改革出版社、北京

――――　（1984）　『漢語外来詞詞典』上海辞書出版社

永嶋大典（1970）　『蘭和・英和辞書発達史』講談社

F.Masini著、黄河清訳（1997）　『現代漢語詞彙的形成―十九世紀漢語外来詞研究』漢語大詞典出版社、上海

沈国威（1994）　『近代日中語彙交流史』笠間書院

日本語教育研究資料（1978）　『中国語と対応する漢語』文化庁

汪大捷（1986）　『中日両用日漢双解同形異義日語漢字詞典』中国農業机械出版社

日本語と中国語対照研究会編（1986）　『日本語と中国語の同形語』

佐藤享（1980）　『近世語彙の歴史的研究』桜楓社

山田孝雄（1940）　『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館

杉本つとむ（1983）　『日本翻訳語史の研究』八坂書房

上野恵司・魯曉琨（1995）　『おぼえておきたい日中同形異義語 300』光生館

王健宜, 王彦良（1995）　『日漢同形詞辨異詞典』商務印書館

（じょ　しでん・九州大学大学院博士後期課程）